

WFP チャリティー エッセイコンテスト 2025

あなたのエッセイが途上国の給食に

「すべての人に食べ物を」 私ができること

主 催 認定NPO法人 国連WFP協会

後 援 世界食糧計画(WFP) 日本事務所、外務省、農林水産省、文部科学省、
全国都道府県教育委員会連合会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、
朝日新聞社、毎日新聞社、日本経済新聞社、東京新聞、NHK

寄付協力 日清食品ホールディングス株式会社、三菱商事株式会社

特別協賛  **日清食品ホールディングス**  **MUFG** 三菱UFJ銀行

協 賛  **ELETEC**  **TOPPAN**  **日清食品チルド**

伊藤忠商事株式会社、伊藤忠リーテイルリンク株式会社、
井村屋グループ株式会社、株式会社カネカ、株式会社湖池屋、コクヨ株式会社、
株式会社小学館、昭和産業株式会社、株式会社真誠、真如苑、
株式会社日本食糧新聞社、ハニニューフーズ株式会社、プリマハム株式会社、
ぼんち株式会社、三菱食品株式会社、株式会社MIYOSHI、無二亦寺、
株式会社村内ファニチャーアクセス、株式会社モリサワ、ヤマト住建株式会社

協 力 コートヤード・マリオット銀座東武ホテル

認定NPO法人 国連WFP協会

〒220-0004 横浜市西区北幸二丁目8番4号 横浜西口KNビル17階

お問合せ

0120-496-819

受付時間 9:00~18:00 (年始を除く年中無休)

<https://ja.wfp.org>

©WFP/Arete/Fredrik Lerneryd



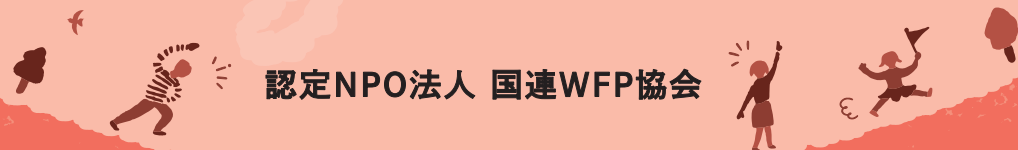
入賞
作品集

「すべての人に食べ物を」 私ができること

WFP チャリティー エッセイコンテスト 2025

あなたのエッセイが途上国の給食に

認定NPO法人 国連WFP協会



ご挨拶

長引く紛争や自然災害、気候変動などの影響を受け、世界では多くの子どもが栄養不良です。この問題を解決するため、国連WFPは学校給食支援を実施しています。本活動への寄付金を集めるイベントとして、国連WFP協会は「WFPチャリティー エッセイコンテスト 2025」を開催し、「すべての人に食べ物を」私ができること」をテーマにエッセイを募集しました。

応募1作品につき、途上国の給食2人分にあたる60円が寄付協力企業より寄付されることから、今回の応募総数21,854通（計1,311,240円のご寄付）により、43,708人の子どもに給食を届けることができます。

ご応募いただいた皆様、ご協賛、ご後援、ご協力いただきましたすべての皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも国連WFP協会の活動にあたたかいご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

認定NPO法人 国連WFP協会 会長

安藤宏基

目次

最優秀賞

小学生部門賞、審査員特別賞（小学生部門）&佳作

中学生部門賞、審査員特別賞（中学生部門）&佳作

高校生部門賞、審査員特別賞（高校生部門）&佳作

高校生を除く18歳以上部門賞、
審査員特別賞（高校生を除く18歳以上部門）&佳作

WFP賞&WFP学校給食賞

国連WFPの学校給食支援

世界の子どもに給食を届けるには？

02

03~04

05~06

07~08

09~10

11

12

13~14

最優秀賞

寄り添うかたち

栃木県 宇都宮大学共同教育学部附属中学校 2年 関 桃羽^{せき もも は}さん

「はい、どうぞ。」

紙袋を受け取った女の子はうつむいた。

「どうしたの?」とのぞきこんだ私を避けるように、涙をうかべて走り去ってしまった。

それは、夏休みに入ってすぐの日曜日。私はフードバンクの食品配布会にボランティアとして参加していた。子育て世帯を対象とした会場は大盛況で、食品を詰めた紙袋は次々と手渡され、笑顔とともに消えていった。眠る赤ちゃんを背負って帰るお母さん、僕の仕事と言わんばかりに紙袋を両手で抱え歩く少年—いろんな背中を見送りながら、私は心の中で「お腹いっぱい食べてね。」とつぶやいた。

満足感と疲労感、今日一日を表す言葉にぴったりだ。けれど、涙をうかべたあの女の子の表情が、帰宅後も私の胸に残り続けた。

数日後、フードバンクに一通の手紙が届いた。

「先日はありがとうございました。私の家は母子家庭で弟が三人います。経済的に厳しく、食品配布会に深く感謝しています。でも、あの時は、同じぐらいの年頃の子から食料を受けとる自分が恥ずかしくなって、あんな態度をとってしまいました。突然驚かせてしまってごめんなさい。」

その手紙を読み、私ははっとした。食べ物に困っている人を助ける、という私の認識の甘さに気づかれたのだ。単に食べ物を配って喜んでもらう活動ではない。感謝の言葉の裏に、支援を受けることへの葛藤や痛みが潜んでいる。自分の弱さをさらけ出すことの恐怖に、寄り添うことが必要なのだと感じた。

「助ける」よりも「寄り添う」こと。支援とは「誰かを引っばる」ことではなく、「隣で一緒に歩く」こと。そんな支援者に、私はなりたい。

そうだ、手紙の返事を書こう。あの子の好きな食べ物はなんだろう。私は卵焼きだよ。甘くて、やさしい味がするから。

選者のコメント

あなたの作品は、「誰かを助けたい」という気持ちの裏にある、一方的な思いや行動が、時に相手を傷つけてしまうことがあるという、人と人との関わりの難しさを、丁寧に描き出していました。

涙を見つめ、戸惑い、考え抜いたその経験の中に、「支援」とは何かを自らの心で問い直す誠実さがありました。あなたの気づきは、助けることよりも「寄り添うこと」の尊さを教えてくれます。

この作品には、人へのまなざしの深さと、社会を見つめる想像力が息づいています。

どうかこれからも、そのやさしさと洞察力を大切に、あなたの言葉で世界を照らしてってください。

ジャーナリスト 元NHKアナウンサー
堀 潤 さん

受賞者のコメント

このたびは最優秀賞という大変光栄な賞をいただき、誠にありがとうございます。フードバンクでのボランティア活動を通して「助ける」よりも「寄り添う」ことの大切さを深く感じました。今回の受賞を励みに、これから人の心に寄り添えるような活動や表現を続けていきたいと思っています。改めて、選考に関わってくださいました皆様に心より感謝申し上げます。

※審査は外部審査員を含め、厳正に行われました。 ※作品中の文言は、原則、原文に基づき掲載しております。

七つの幸せ

神奈川県 カリタス小学校 6年 しのぎき りん 篠崎 凜 さん

私の通う学校の総合学習のテーマは、「世界の食の平和」だった。初めは、いつも当たり前身近にある「食」についてもっと知りたいという思いから色々な国の食を調べた。他の国はどんな食を楽しんでいるのだろう、日本とはどんなちがひがあるのだろうと期待に胸をふくらませて調べ始めた。でも、私の目に入ってきたものはみな私の思う食ではなかった。私達の思う食と調べた先の国にいる人達の思う食はちがうのだと。同じ食に関わっているとは思えない事に目をうたがった。しかし、もっとくわしく調べる内にその現状がどれだけのものであるかを思い知り、なんとかしなければと思った。私達に出来る事はないのか、力になれる活動はあるのかとさがすうちに知ったのが、「フードドライブ」というものだった。私達の家で余った食品を集め、必要としている国に送る活動。これこそ、調べた先の国にいる人達に少しでも食という楽しさを知ってもらうチャンスだと私は思った。私達と一緒に「食」を味わい、楽しんでほしいという思いで学校全体に呼びかけをした。そしてなんと、大きなダンボール七箱分の食品が集まったのだ。世界のみんなが食の楽しさを知り、味わえるようにしたいという気持ちが大きく合わさった七箱に私はとてもうれしくなった。このうれしいという感情と七箱の「食」を早くとどけたいと強く思った。私達のとった行動で、今食べる楽しさ、うれしさを知った人達がいるかもしれない。そう考えると私もうれしくなる。そんなうれしさの循環が沢山起こったらいいと思った。

この経験が沢山の人につながり、食べるうれしさと楽しさを世界で共有していきたい。

命の順おくり

東京都 白百合学園小学校 5年 あら き ゆう こ 荒木 結子 さん

私はおばあちゃんの作るロールキャベツが、大好きです。遊びに来てくれた時は、必ず一緒に作ります。そして「おだちん」と言って、手伝うとおこづかいもくれます。最近では、たねも上手に包めるようになりました。おばあちゃんも、子供の時に作り方を習ったそうです。食べ物が手に入りにくい時代だったので、キャベツをむだにしないようにしんの部分も細かく切ってたねに入れて、丸ごと使います。工夫を重ねて伝わってきた大切なレシピを、私も作れるになりたいです。そしてにこむ間に私は会えなかった間の出来事を、おばあちゃんにたくさん話します。そうして思いをいっぱいつめて出来上がったロールキャベツは、最高に美味しくて、幸せな気持ちになります。私があつという間に食べ終わると、おばあちゃんは自分のロールキャベツを、私におすそ分けしてくれます。私が「おばあちゃんはお腹すかないの?」と聞くと、「順おくり、順おくり。元気に育ってね。」とうれしそうに言います。

「順おくり」というのは、自分がしてもらった事を、次は自分がいつか、誰かにしてあげる事を言うそうです。おばあちゃんに返すのではなく、次に必要としている人に渡していく。そうやって受け継いで、分け合っていくのです。

私はおばあちゃんと、戦争が続いて多くの人が食事のままならないというニュースを見ました。食事は栄養を取るためだけでなく、思いがつまった大切なものです。食事は、「命の順おくり」だと思います。世界中の人達がそんな食事をとれるように、みんなで順おくりできたらいいなと思います。私はもらったおだちんを、戦争で困っている人への募金にしました。どうか戦争で困っている人達に食事がとどき、幸せな気持ちになれますように。私はこれからも、自分のできる順おくりをしていこうと思います。

選者のコメント

世界の現状を知り、フードドライブという家庭に余った食品を必要としている国に送る活動に思いを至る。そして学校によびかけ7箱分の食料を世界の必要としている人に届けることができた。その行動力と発信力に驚くとともに、こうしたことが未来の平和につながるのだなと思った。

国連WFP協会 顧問 プロスキヤー・博士(医学)
三浦 豪太 さん

受賞者のコメント

この度は、素晴らしい賞をありがとうございます。1年生の夏休みに何か1つ続けてみよう、毎日日記を書く事に決めました。最初は上手く書けず大変でしたが、気付いたら何気ない出来事を拾い上げ、書く事が出来る様になりました。今では書く事が大好きです。この積み重ねが賞に結びついて嬉しいです。このコンテストが、発展途上国の人々の助けになり、私も貢献できたのかなと嬉しく思います。本当にありがとうございました。

選者のコメント

親切や優しさは繋いでこそ意味があるのだと、この作品は教えてくれました。
おばあちゃんが教えてくれた命の順送りという言葉を大事にして、また次の世代に伝えて欲しいなと思いました。ふなっしー

ふなっしー さん

受賞者のコメント

今回、審査員特別賞に選んでいただきありがとうございます。私にとって食事は大切なもので、たくさんの方の思いを感じることができます。食べ物の命だけでなく、食事にこめられた思いと一緒に頂いているから、幸せな気持ちになれるのだと思います。食べ物に感謝して、受け継がれていく大切な命の思いを、私も誰かに届けられる人になりたいと思います。

小学生部門
佳作

神奈川県 カリタス小学校 5年 井上 佳音さん
神奈川県 カリタス小学校 5年 久保 茉莉咲さん
マレーシア ガーデンインターナショナルスクール クアラルンプール 5年 高橋 英志郎さん

小学生部門
佳作

東京都 国立学園小学校 4年 田中 夢乃さん
神奈川県 横浜市立美しが丘西小学校 6年 早川 みにさん

初めてのチャリティーワーク

東京都 頌栄女子学院中学校 3年 伊藤 桃子 さん

小学二年生の春、私は初めてチャリティーワークに参加した。それは当時通っていたサンフランシスコの聖アグネス教会によるもので、内容は、教会の近所の通りで路上生活をしている、いわゆるホームレス状態の方々に食事を配るというものであった。当時の私にとってチャリティーはあまり馴染み深い言葉ではなく、初めて母からこの活動について聞いたときは少しだけ心理的な壁を感じた。あまりよい考え方ではないが、小学二年生だった私はホームレスの人々のことを危険な存在と判断していたため、彼らに近づくことについて抵抗があったのだ。突然大声を出したり変な液体を持って絡んできたりすることが多かったのだ。だが、恐怖を振り切って、思いきって活動に参加してみることにした。ミサを終えた後、教会の施設でホームレスの方々に配るためのサンドイッチを作り、紙袋に入れ、箱に詰め、それを持って友達と一緒に教会近くの通りで生活している人々を探し、食を配り始めた。思っていたよりも路上生活をしている方々は多く、最初はサンドイッチを渡すのが怖かったが、友達が笑顔で渡しているのを見て、私も勇気を振り絞って渡してみた。そうしたら、いつもの印象とは全く違い、ホームレスの人達は満面の笑みで丁寧に感謝を伝えてくれた。その時初めて、少ない食事が彼らにとってどれだけ重要で貴重なのかを知り、私がどれだけ恵まれているかに気づいた。毎日三食の美味しいご飯が食べられることが多くの人々にとって「普通」ではないのだと知ったのだ。家に帰ってから調べてみると、世界中に生活に困窮していて、食糧支援が必要な方々が何億人もいることを学んだ。私はこの活動を通して、食にありがたみを持つようになり、また食に困っている人達の助けになれるような機会があれば喜んで引き受けようと思えるようになった。

分けあいっこ

兵庫県 学校法人須磨学園 夙川中学校 3年 大久保 七海 さん

私は意地を張って、毎日のように小学生の弟と喧嘩をする。もうすぐ高校生だというのに恥ずかしい話だ。しかし、こんな私でもごはんのことに限っては少し違う。分け合いっこするのだ。正確に言うと一口分けるだけなのだが、ごはんだけは意地を張らず少し分けてやる。すると、弟も私に少しごはんを分けてやる。そうすると、「おいしい」も分け合いっこできる。分け合うと、「おいしい」は100倍とまでは言わないが、2倍、3倍くらいにはおいしくなる気がする。

私はこんな「おいしい」を分け合いっこすることがもって世界で当たり前になればいいと思う。先進国日本でぬくぬくと育った私には、食べられることが当たり前ではない人々の気持ちを想像してみても1ミリたりとも理解することはできないだろう。しかしごはんを分け合うことができるという私の喜びは、食べることができるといふ彼らの喜びに重なる部分はきっとあると思う。そして、それこそ彼らの「おいしい」は、私の100倍、いや、1000倍ほどにもなるかもしれない。

このエッセイを書くと、応募1作品につき給食2人分の寄付が行われるらしい。となれば、私は彼らの中の2人とごはんを分け合うことができるのではないかな。少し違うかもしれないが、そう思うとまた少し、ごはんがおいしくなる気がした。

選者のコメント

はじめてチャリティーワークに参加した時の気持ちを素直に正直に作文してくれた。近寄り難かったホームレスの人たちと勇気を出して触れ合ったことから生まれた心の変化。誰もが食事を求めている、食事は笑顔を運んでくれるということ。そしてわずかな食事さえ食べられずに苦しんでいる世界の人たちに思いを馳せた発想の広がり共感しました。読み終わった時に、清々しさを感じた作文です。

国連WFP協会 理事 クリエイティブディレクター・環境マンガ家
本田 亮 さん

受賞者のコメント

2025年度のWFPチャリティー エッセイコンテストで賞をいただけたこと、とても光栄に思います。私の初めてのチャリティーワークを通して学んだことや考えたこと、またその経験をこれからの人生でどう活かしていきたいかを考えながら、このエッセイを書きました。十分な食事を得られていない人が世界には多くおり、その人たちのために少しでも行動することの大切さを、たくさんの人に伝えられたらと思っています。

選者のコメント

今年もたくさんの作品をありがとうございました。どのエッセイも、何気ない日常から「食の大切さ」や毎日食事できていることがいかに特別なことなのかを気づかせてくれるものばかりでした。日頃、私自身も食というものが当たり前になりがちですが、身近な人と何かを分け合ったり、誰かを想う気持ちを普段から少しずつ持つことができたりすると、それが連鎖していつか知らない誰かの支援に繋がるのかもしれないと教えていただいたエッセイでした。

国連WFP協会アンバサダー 女優
広瀬 アリス さん

受賞者のコメント

この度は、このコンテストの審査員特別賞に選出していただき、誠にありがとうございます。私なりに、言葉を1つ1つ大切に紡いだため、このような賞をいただけて、とても嬉しく思っております。ちっぽけな、私のエッセイにのせた言葉が、世界中の子どもたち、人々のために、少しでも役に立てば大変幸いです。1人でも多くの人が幸せに生きることができるとように。

中学生部門 佳作

神奈川県 川崎市立住吉中学校 3年 金箱 勇仁さん
兵庫県 学校法人須磨学園 夙川中学校 2年 岸川 純太さん
千葉県 我孫子市立我孫子中学校 2年 袴田 心さん

中学生部門 佳作

東京都 東京都立両国高等学校附属中学校 1年 橋本 古都さん
山梨県 道志村立道志中学校 1年 渡辺 莉那さん

三度目のチキンカレー

兵庫県 学校法人須磨学園 須磨学園高等学校 2年 ^{なんば ひなこ} 難波 日菜子 さん

「これ、味見してくれない?」と、いつもの声が聞こえる。母は月に一度、助産院へ赴きボランティア活動を行っている。そこでの母の役割は、生後間もない赤ちゃんを連れてお母さん達に食事を提供することだ。今回のメインディッシュは、バターチキンカレー。この一週間、母はカレーと向き合っている。味見もこれで三回目だ。

あくまでもボランティアだと言いながら、何度も試作をするその姿から、母が産後ケアに対して特別な思いを抱いているのは想像できた。産後ケアとは、出産後の女性の心身や育児をサポートするための事業だ。昼夜問わず泣く赤ちゃん中心の生活では、座って温かいご飯をゆっくり食べることも難しい。誰かに赤ちゃんを見てもらいながらそうすることがどれほど有難いのか、母にはよく分かるのだ。実際、母は産後うつを経験したそうで、家族からの協力が得られない中、四六時中小さな私と二人ぼっちで過ごすうちに、眠れなくなり、ご飯からは味が消えたという。虚ろな目でベビーカーを押しながら、いっそ飛び降りようかと迷う日々を救ったのは、父の職場の社長とそこご家族だったそうだ。彼らは母を家へ招き入れ、私の面倒まで見てくれた。ご家族からの深い愛情と温かいご飯のおかげで、母は徐々に表情を取り戻せたそうだ。

当時のことは今でも感謝しているらしい。産後すぐのお母さんたちには、温かくて美味しいものをゆっくりと味わって、誰かと一緒に楽しく会話しながら食べてほしい。そんな思いのこもった三度目のチキンカレーからは、優しい母の味がして、目頭が熱くなった。

「美味しい、今までで一番、美味しいよ」

やっとのことでそう答えるしかできない自分が情けなく、恥ずかしかった。それでも、いつかは母のように、助けが必要な人に手を差し伸べられる大人でありたい。涙が頬をつたうのはカレーが辛いせいだ、と嘘をついて、私はがむしゃらに頬張った。

選者のコメント

優しい気持ちがいっぱい入ったお母さんのバターチキンカレー、きっと助産院のお母さんたちを安心させたことでしょう。手作りの美味しい料理をみんなで食べれば、不安な気持ちもしばしば忘れ、皆笑顔になりますね。日菜子さんもお母さんの温かい気持ちを忘れずに誰かの役に立って、次の世代にも伝え続けてください。

国連WFP協会 理事 元世界食糧計画(WFP)アジア地域局長
忍足 謙朗 さん

受賞者のコメント

この度は高校生部門賞に私の作品を選出いただき、誠にありがとうございます。
世界には、誰かのため、何かのために自分の食事が疎かになってしまう人がたくさんいます。それは小さな赤ちゃんを抱えるお母さんも例外ではなく、彼女たちに温かいごはんを届けようという情熱を注ぐ母の姿に感銘を受け、この作品を書きました。
母のカレーがお母さんたちに元気と力を与えたように、私の言葉も誰かの心を動かし、世界のどこかで命を繋ぐごはんとなっていれば幸いです。

未来を共に生きる仲間のために、 今私ができる事

福岡県 明治学園中学高等学校 高校2年 ^{いたみ りおな} 伊丹 理桜菜 さん

私はフィリピン・セブ島のボランティア活動に参加した。活動は貧困地域に住んでいるスラムの子どもたちにプレゼントを届けるというものだ。やっとの思いでたどり着いたスラムは大きなゴミ山の中や悪臭がたちこめる場所にあり、私が考えていた生活する場所とはかなりかけ離れたものだった。そんなゴミ山の中で、ご飯を買うお金を得るために一日中ゴミを集めている子どもたちがいた。私はこの時、目の前に広がる貧困の現実という言葉と、自身の無力さを痛感した。

セブ島といえば、世界中から観光客が訪れるリゾート地だ。そんな観光地のすぐそばにあるスラムでゴミを拾う子どもたちや物乞いをする人々。私がセブ島の空港で食べた600ペソ(約1,500円)のラーメンと、スラムで食べた6ペソ(約15円)のパン。同じ島の中で食事の値段に100倍もの差があるという現実。15円のパンは子どもたちがゴミを拾って得たわずかな収入で買える食事だ。観光客が何も考えずに捨てたものが誰かの「命綱」になっていた。

私は活動の中でQueenと出会った。彼女は私たちの宿泊施設の近くにあるスラムに暮らしていて、彼女の家族が夕食に招待してくれたことで私たちは仲良くなった。彼女は小学4年生。スラムに住みながらも日本の支援者のおかげで学校に通い、その結果子どもの教育に関する家族の意識が高まりお兄さんも奨学金を得て大学に通うようになったそうだ。しかし、この夏、彼女が支援を失い学校に通えなくなるかもしれないことを知った。私はすぐに家族にお願いして自分の貯金やこづかいの中から毎月1,000円を彼女の支援に使うことにした。「見て見ぬふりをしないこと」これが、私の世界を変える最初の一步だった。SDGsは決して政府や国際機関だけが取り組むものではない。「誰かを置き去りにすることにより得られる豊かさ」ではなく「誰もが未来を描ける社会」を私はこれから作り上げていきたい。

選者のコメント

彼女のエッセイは、SDGsが政府や企業、国際機関のための指針だけではなく、人類全体に共通する責任であることを美しく伝えています。彼女の言葉に共鳴し、私もまた、一人ひとりが自らの未来を思い描き、創り出す力を持てる社会を築いていきたいと感じました。

マリウス葉 さん

受賞者のコメント

審査員特別賞という光栄な賞をいただき、心より感謝申し上げます。
セブ島のスラムでのボランティアを通して、毎日ご飯を食べられることが当たり前ではない人達がいる現実と直面し、「見て見ぬふりをしないこと」の大切さを学びました。その思いを多くの人に伝えたい一心で書いた作品です。これからも「誰もが未来を描ける社会」を目指して、自分にできる行動を続けていきたいと思っています。

高校生部門 佳作

東京都 学校法人駒込学園 駒込高等学校 1年 大久保 龍之介さん
兵庫県 学校法人須磨学園 須磨学園高等学校 2年 甲斐 光織さん
兵庫県 学校法人須磨学園 須磨学園高等学校 3年 上村 花緒さん

高校生部門 佳作

福岡県 精華女子高等学校 1年 亀井 美月さん
東京都 田園調布学園中等部・高等部 高等部2年 川崎 莉穂さん

高校生を除く
18歳以上
部門賞

一杯のごはんが世界を変える

東京都 学校法人ISI学園 専門学校 東京ビジネス外語カレッジ 2年
アディカリ キラン
ADHIKARI KIRAN さん

「食えること」は、すべての人間にとって当たり前で生きるための基本的な権利です。しかし世界を見渡すと、「当たり前ではない」現実があります。私はネパールの小さな農村で育ちました。雨が降らずに作物が育たなかった年には、家族全員でおかゆだけの食事が何日も続きます。ある日、子どもが道に落ちていたパンのかけらを拾って食べていました。やせ細った手と、それを咎めることができなかった自分の弱さを今でも忘れられません。「なぜ自分たちは十分に食べられないのか？」その疑問は今の私の考えの原点です。

日本に来て、コンビニやスーパーで食品が大量に廃棄されるのを見て、驚きを通り越してショックを受けました。賞味期限や見た目だけで何トンもの食品が「ゴミ」として処分されています。この「食の不均衡」は、国と国、地域と地域、人と人との間に存在する大きな課題です。

私はネパールの農村地域に日本の知識や技術を持ち帰り、持続可能な農業を支援します。教育が足りず、栄養の大切さを知らない家庭も多いため「食育」活動も必要だと感じています。

「お腹がすいた時の気持ち」は、単なる空腹ではありません。不安、怒り、絶望感、自分には価値がないという思い。そうした感情が人間の心を蝕み、未来に希望を持たなくさせます。しかし、「一杯の温かいごはん」が人の心を変え、生きる力を取り戻させることもあります。疲れて落ち込んだ日、日本人の友人が手作りのおにぎりをくれた時、涙が出るほどうれしかった経験があります。だからこそ、私は「食べ物」が人と人をつなぎ、希望を届ける力を持っていると信じています。

今の私にできることは小さなことかもしれませんが、将来は日本とネパールをつなぎ、世界の「食の不平等」を減らす一人になりたいです。そのために学び続け行動し続けます。「すべての人に食べ物を」この願いを私の人生の使命として胸に刻んで生きていきます。

選者のコメント

僕も同じ経験をしました。半農半漁の家に生まれ、海が時化ると食べ物が無くなり、生活が苦しいいつもお腹を減らした少年でした。ですから、アディカリさんの気持ちは痛いほどわかります。日本では消費期限を過ぎた食品は、国の指導によりたくさん廃棄されています。僕がみる限りまだじゅうぶん食べられるものばかりです。僕はこの基準は見直しが必要だと思います。我々日本人ももっと関心を持つべきだと強く思いました。ありがとうございました。

国連WFP協会 顧問 三國オーナーシェフ
三國 清三 さん

受賞者のコメント

このたびは、栄えある賞をいただき、心より感謝申し上げます。
ネパールの小さな村で育った私は、「食えること」が命と希望をつなぐ力だと感じています。
日本で学んだ“もったいない”の心を胸に、食を通じて人と社会を笑顔でつなげたいです。
この受賞を励みに、日ネ両国の架け橋となり、誰もが温かいごはんを食べられる世界を目指してまいります。

高校生を除く
18歳以上部門
佳作

東京都 学校法人ISI学園 専門学校 東京ビジネス外語カレッジ 1年 YIN XIQUANさん
埼玉県 西武学園文理中学・高等学校 教員 吹田 健一郎さん
東京都 水地 暁洋さん

審査員特別賞
高校生を除く
18歳以上部門

食で未来を変える

東京都 学校法人ISI学園 専門学校 東京ビジネス外語カレッジ 1年
アボンクケチュ ガエレ
ABONGKECHU GAELLE さん

私はカメルーンのバメンダという街で育ちました。そこは今も続く紛争の中にあります。朝、銃声が響く中で学校へ行き、帰れるかどうか分からない日々でした。しかし、本当に辛かったのは「恐怖」よりも「空腹」でした。

ご飯がない日もあり、授業中にお腹が鳴るのを必死で我慢しながら勉強しました。クラスメートの中には空腹で倒れたり、学校をやめる子もいました。私が一番つらかったのは、何もないふりをすることでした。心の中で、こんな状態でどうやって未来を描けるのか…そう思い続けていました。

だからこそ、私は「Better Smiles」という若者主導の団体に参加しました。この活動はバメンダで5年以上にわたって続いており、私は単なるボランティアではなく、チームの中心として活動しました。SNSの運営やデザイン、イベントの企画を担当し、MispaやHelping Handsなど、約100人の子どもたちが暮らす孤児院にも支援を届けました。初めて支援物資を届けた日、子どもたちの笑顔、そして施設のスタッフの涙を見た時、自分の中で何かが変わりました。

これはただの「援助」ではなく、「尊厳」を取り戻す行動なのだと実感しました。そして、私自身がその一部であることに誇りを感じました。

今、私は日本でビジネスとロジスティクスを学んでいます。目指しているのは、地元の食材を使ったカメルーン向けの栄養価の高いスナックを開発することです。Calbeeのように、子どもが笑顔で食べられるおやつです。これは農家の支援にもつながり、雇用も生まれます。

私は「食」は未来を守る力があると信じています。空腹は、集中力や学びの機会、そして夢までも奪ってしまう「泥棒」です。だからこそ、私は行動したい。

これは簡単な道ではありません。でも、私はその痛みを知っているからこそ、進む理由があるのです。

選者のコメント

アボンクケチュさん、日本に来てくれて有難う。壮絶な体験。勇気ある行動に心揺さぶられました。母国の子も達が明るい未来を描けるようにと学ぶ姿勢から、私達もまた多くを学ぶことができます。カメルーンの現状。尊厳を見失わない生き方とは。そして、食べることの大切さ。自分事として迫ってきました。ゴールは遠くても、そこには確かな希望があります。一緒に頑張りましょう！

国連WFP協会アンバサダー 俳優
竹下 景子 さん

受賞者のコメント

この度は栄えある賞をいただき、心より感謝します。故郷カメルーンでは食の不安を身近に見て育ち、ボランティアとして孤児院支援に関わってきました。今回のテーマは、食が笑顔と安心を生む力だと改めて教えてくれました。学びを胸に、身近な場所から小さな行動を続けます。

高校生を除く
18歳以上部門
佳作

香川県 佃 亜紀さん
香川県 三崎 もかさん

戦後80年、私にできること

神奈川県 湘南白百合学園小学校 4年 八百 花奈子 さん

今年は戦後八十年でした。私は戦争をけいけんしたことがないけれど、夏休みに映画やニュース、まん画を見て、どんな戦争だったかを知りました。

戦争中は家や畑がやきつくされ、食べ物がいっぱいなくなりました。たくさんの方が亡くなったそうです。お父さんやお母さんが死んでしまい、子供だけで生きなければならない中で、一生けん命池のカエルやタニシ、生えている草を取って食べたりしたけれど結局、栄養不足で亡くなった子供たちがたくさんいたと聞きました。それを知ったとき私は、あまりにもかわいそうで心がぎゅっといたくなりました。

今、私は毎日家族とすごしていて、楽しく学校に通うこともできています。好きなことを好きな時にすることができます。ごはんも毎日三食、ほかほかの真っ白なお米とおいしいおかず、三時のおやつなども食べています。おなかがいっぱいだったこともほとんどありません。それはとてもしあわせな事ですけど、私は当たり前だと思って生活していました。

日本の戦争は終わったけれど、世界ではまだ戦争をしていて大変な思いをしている人たちがたくさんいます。その人たちはきっと八十年前の日本と同じように、おなかを空かせて苦しい思いをしていると思います。

子供の私でも、そのような人たちにできる事はいくつかあると思います。例えば、自分のおこづかいをばい金することや、小さくなって着られなくなった洋服やくつを寄付することなどです。そしてこの作文を応募すると、こまっている方たちのために給食が配られると聞いたので、少しでも多くの人を助けられたらうれしいです。

そして、私は当たり前のようにおいしいごはんが食べられることに感謝し、自分に何ができるかを考えながら毎日を大切に生きていきたいです。

選者のコメント

今年は戦後80年です。日本では戦中、戦後に食べるものがなく、とても厳しい時代がありました。世界に目を向けると、残念ながら80年前の日本と似たような世界が広がっています。八百さんは昔の日本を知り、当時の人たちが直面していた問題について学び、感じたことを、素直に表現してくれました。世界の飢餓状況を学び、自分ができる小さなことから始めてみようという思いを、これからも大切にしてくださいね。

世界食糧計画 (WFP) 日本事務所 代表
津村 康博 さん

受賞者のコメント

今回このような素晴らしい賞をいただくことができ、とてもうれしいです。

戦後80年となった今年の夏休み、私は今でも世界各地で続いている戦争のことや、そこで苦しんでいる人たちの事を考えてこの作文を書きました。

毎日ごはんを食べられることは当たり前ではないこと、小学生の私たちでも世界の人のためにできることはたくさんあるんだ、ということをみんなに伝えていきたいです。

国連WFPとは

国連WFPは飢餓をなくすことを使命とする国連唯一の食料支援機関です。
2024年は120以上の国と地域で1億2,400万人の人びとに食料を届けました。

国連WFPの学校給食支援

国連WFPは毎年およそ2,000万人以上の途上国の学校の子どもの給食を届けています。子どもの健全な発育を支えると共に、就学率・出席率の向上に寄与しています。給食があることで親が積極的に子どもを学校に通わせるようになり、子どもも空腹に悩まされず、集中して勉強することができます。就学の機会を与えられにくい女子児童の通学も促し、女性の権利向上につながります。さらに、国連WFPは可能な限り給食で使う食材を地元で調達する「地産地消」を推進しており、地域の持続的な経済発展にも寄与しています。

国連WFPの学校給食支援は途上国で子どもの未来を支えています。

学校給食の効果

- 親が子どもを通学させるようになる
- 栄養状態が改善される
- 勉強に集中できる
- 女の子も学校に通えるようになる
- 教育を受けて夢や希望が広がる
- 社会や国の発展にもつながる



今回のコンテストに寄せられたエッセイ1作品につき、途上国の2人の子どもの給食を届けることができます。皆さんでつくるより良い未来のためにこれからもできることから取り組んでいきましょう。



世界の子どもに給食を届けるには？

1 もっと知る

知ることは支援の第一歩です
世界で起きていることや国連WFPの支援策について知ってみませんか

～ 知る方法 ～

ホームページに
アクセス
メルマガ登録

<https://ja.wfp.org/>

SNSフォロー



国連WFP協会 @jawfp_official



@jawfp_official jawfp.official

出前授業を
依頼



国連WFP協会は教育機関、企業・団体に授業や講演のための講師を派遣しています。学校の授業の一環として、社員研修の一環としてご活用ください。知り、そして何ができるのかを一緒に考えましょう。

詳しくはこちらから



2 伝える

「知る」に加えて、周囲に伝えてみませんか

国連WFP協会では、配布物の無償提供と掲示パネルと募金箱の貸し出しを行っています。

例

- 展示等を活用し周知
- 募金活動
- バザーの売り上げから寄付
- 寄付付きメニューの販売

参加費の一部を寄付するチャリティーウォーキングイベント「WFPウォーク・ザ・ワールド in ○○」を企画。

詳しくは
こちらから

ツール
貸し出し



WFPウォーク・
ザ・ワールド



3 買物

レッドカップキャンペーン

給食を入れる容器として使われている赤いカップを目印に、「レッドカップキャンペーン」に賛同する企業からマークのついた商品が販売されています。このマークのついた商品を購入することが、途上国の子どもに学校給食を届ける後押しになります。



飢餓から救う。
未来を救う。
WFP
国連世界食糧計画

レッドカップキャンペーンの
詳細や対象商品はこちら



4 寄付

寄付をして応援してみませんか

※未成年の方は保護者の承諾を得てからお申込み下さい。



詳しくはこちらの
二次元コードから

